

〔資料〕

小児看護学実習後に看護学生が捉えた小児看護の役割

谷口 恵美子 服部 佐知子 長谷部 貴子 長谷川 桂子 世一 和子

A Nursing Student's Perception of the Role of Child Nursing after Clinical Practice

Emiko Taniguchi, Sachiko Hattori, Takako Hasebe, Keiko Hasegawa, and Kazuko Yoichi

I. 目的

近年、小児医療現場でも在院日数の短縮化が進んだことから、医療的ケアを家族が習得し、在宅療養する子どもが増えている。そのため、子どもにとって、最も身近な存在である家族が子どもを看っていくためにも、家族を含めた看護が必要となってくる。

3年次に行われる小児看護学領域の医療施設実習は、複数の施設を用いて2週間行われている。しかし実習では、受けもち期間内に疾患とその症状の理解や入院治療時の看護展開を行うことに精一杯で、退院後に子どもと家族が地域に戻り在宅療養を送ることになった時の子どもや家族について十分に考える機会がない。そのため本学の小児看護学実習では、実習終了後に実習で受けもった事例を用いて、現在から退院後までの子どもと家族について考えるグループワークを用いた事例検討を行っている。このねらいとして、学生が実習だけでは考察できなかった、健康問題への関わり方を発展して考え、地域で生活する子どもとその家族への看護職の関わりを認識することを期待している。そこで本研究では、小児看護学実習後の事例検討の結果、学生は小児看護の役割をどのように捉えたのかを明らかにすることを目的とする。

II. 小児看護学実習後の事例検討の位置づけと内容

3年次に行われる小児看護学実習は、1学年が三つの組に分かれ、ローテーションして受講する。一組は26名前後の学生で構成される。小児看護学実習は、医療施設実習（3施設を利用しいずれかで実習を行う）と小・中学校実習（3～4施設を利用しいずれかで実習を行う）の二

つの実習で構成されており、一組の学生全員が二つの実習を終了した段階で、「臨地での事例を基に既習の知識を踏まえて、より発展させた看護を考えることができる」を目標として、小児看護学実習の最終的なまとめの事例検討を行っている。事例検討は、グループワークと全体発表で構成されている。グループワークの時間は約100分間、グループワーク後の全体発表は質疑応答を含め60分間である。

グループワークは、グループごとに指定した事例について話し合う。約26名の学生を4グループに分け、グループには3医療施設で実習した学生を均等に配置する。事例を受けもっていた学生がグループメンバーに事例の紹介を行い、事例についてメンバーが共通認識したのちに事例検討を行う。その内容は①子どもの健康問題の理解、②子どもの健康問題について家族の認知、③発達を見通しての近未来像、④居住地域の特徴と利用可能な社会資源、⑤子どもに関わる看護職の役割についての5点である。

事例の選抜は、グループ内の学生が医療施設実習で受けもった事例から教員が行う。選抜に際しては実習施設間の偏りがなく、事例の年齢が偏らないように乳児期、幼児前・後期、学童期の各期がそろうこと、慢性期に移行しやすい、または治癒したとしても家庭で継続した経過観察が必要な小児期特有の疾患であり、グループワークで意見を考えやすいことに留意している。

教員は、実習指導を行った事例に該当するグループを担当し、事例の受けもち学生の事例紹介の中で事例理解のために追加したほうがよいことの指摘、討議の内容に

関して実習中に重要な場面があり、それを事例の受けもち学生が忘れていた場合の想起の促し、討議内容に関して1, 2年次に行われた講義資料の振り返りの提案などを行う。

事例検討終了後、小児看護学実習の最終的なまとめとして討論からの学びを書くレポート（A4用紙1枚弱）を課している。提出は当日中である。

III. 方法

1. 研究対象とデータ収集時期

対象は、平成23年度に10月から11月に小児看護学実習を履修した26名のうち、研究承諾の得られた24名の事例検討後のレポートの記述内容である。本来であれば履修者全員を対象にすべきところ、実習進行中にレポートの形式を変更した経緯があり、同一のレポート課題と用紙を用いた履修者に限定した。データ収集は、科目評価確定後の翌年2月である。

2. 分析方法

学びの記述の中から、学生が小児看護あるいは小児看護師の役割として学びを記述していると研究者間で判断した文章を抽出しデータとした。一文章だけでは役割の対象や目的が判断しにくい場合は、前後の文章を含めてデータとした。次にデータを要約し、データの主旨が類似するものを集めてサブカテゴリとした。さらに類似したサブカテゴリをカテゴリに分けて整理した。この作業は、小児看護学を専門とする共同研究者間で、合意が得られるまで繰り返し検討した。

3. 倫理的配慮

小児看護学実習終了後に研究参加依頼を紙面と口頭で学生に行った。学籍番号と氏名を除いたレポートの複写を行い、これを実習記録に綴じて、当該科目成績が確定した後の実習記録返却時に学生に渡し、複写の提出をもって同意とした。そのため提出後の取り消しはできないことを説明した。研究説明と複写の提出に時間差があり学生が研究依頼を忘れていたことが考えられるため、実習記録返却時にも研究説明を再度行った。

なお本研究は岐阜県立看護大学研究倫理審査部会の承認を受けた（承認番号2230）。

IV. 結果

58のデータが抽出され、分析の結果10のサブカテゴリに分類され、さらに4のカテゴリに分類された（表1）。以下、カテゴリは《》、サブカテゴリは〈〉で示した。

1. 将来の成長・発達を踏まえて健康上の問題に対して支援する

《将来の成長・発達を踏まえて健康上の問題に対して支援する》は、子どもの健康問題に対する支援について表しており、2サブカテゴリに分けられた。

学生は、子どもの今後の生活のしかたや、成長・発達や環境などの影響を考慮して支援することが必要だと考えており、役割を〈子どものこれからの生活や成長・発達による変化を踏まえて支援する〉と捉えていた。

また成長・発達による変化を考慮したうえで、健康上の問題の予測、予防、対策をすることが必要だと記述しており〈子どもの成長・発達に伴って生じる問題を予測し支援する〉と捉えていた。

2. 子どもと家族が子どもの健康を守る力を獲得できるようにする

《子どもと家族が子どもの健康を守る力を獲得できるようにする》は、子ども自身や家族が、健康を維持増進しながら家庭で生活するために必要な知識や技術習得したり、理解するといった相手の行動や認識の変化に向けての関わりを表しており、4サブカテゴリに分けられた。

子どもに対しての役割は、学生は、疾患を持った子どもがこれからのことを自分で考えていけるように、特にセルフケアが必要な場合には、成長・発達段階に応じて病態の理解が進められるようにすることが大切であると考えており、役割として退院後やその先の未来も考えて〈子どもが自己決定や自己管理する力を獲得できるようにする〉と捉えていた。

親に対しては、学生は、親が子どもを養育したり、子どもの疾患についての知識や必要な技術を習得することの重要性を考えており、役割を〈家族が子どもへのケアに必要な知識や技術を獲得できるようにする〉と捉えていた。

またそのためには一部の家族員だけでなく、すべての家族員の協力が必要であり、家族の力を高めていくことが必要であると考えており、役割を〈家族の力を十分に発揮できるようにする〉と捉えていた。

表1 学生が捉えた小児看護の役割

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容の要約例
将来の成長・発達を踏まえて健康上の問題に対して支援する	子どものこれからの生活や成長・発達による変化を踏まえて支援する	入院により普段の生活が中断されていることを頭に置いて、退院後の子どもの生活やこれからの発達を見通して先のことまで考えて関わっていくことが大切である。 子どもがこの先どのように生活していくかを把握しそれに合わせた看護援助を実施する。 疾患や障害が子どもの生活にどのような影響をもたらし、今後の生活や成長・発達に関係していくのかまで見据えていくことが重要である。
	子どもの成長・発達に伴って生じる問題を予測し支援する	患児が今後どのように成長・発達していくかを見通して考えることで、問題を予測し、予防ができた、それに対する準備ができたり、リスクを減らすことができ、今だけのケアではない継続した支援につなぐことができる。 現段階で必要な看護だけでなく、退院後の生活やそこから起こるリスクなど、子どもの近未来を予測して看護を実践していく必要がある。
子どもと家族が子どもの健康を守る力を獲得できるようにする	子どもが自己決定や自己管理する力を獲得できるようにする	将来的には子ども自身が疾患や障害を理解して受け入れ自分で対応していくことが求められるので、本人の理解する能力に合わせて知識を提供し、ケアの方法を教えていくなどの働きかけが必要である。 子どもが自分で考え、決定していけるように、発達段階や能力に応じて説明したり促していくことが求められる。 子どもの発達段階に合わせて疾患の理解を促したりセルフケア能力を高めていくことが看護職としての役割である。
	家族が子どもへのケアに必要な知識や技術を獲得できるようにする	子どもが年少であるほど子どもの養育には親の存在が不可欠であり、親への養育に関する知識の提供や技術指導が重要である。 家庭で医療的ケアが必要に場合は、親に知識や技術を提供し、指導し、退院後も継続してケアが行えるようにすることが大切である。
	家族の力を十分に発揮できるようにする	子どもが疾患を抱えて地域で生活していくためには、家族の存在は必要不可欠であり、両親だけでなくきょうだいや祖父母の協力も得る。 すべての家族員に働きかけ、「家族の力」というものを高めていく関わりをしていくことが重要である。
	家族が子どもの健康問題を受け入れられるようにする	家族が病気をもつ子どもへの関心の程度によって、その後のケア、現在の状態の維持、サービスの利用にも影響を及ぼすため、家族が子どもの健康問題の現状を受け止められるようにする。 子どものQOLを高めるためには子どもが家族からのサポートを受けられるように、家族の受け入れ態勢を整えていくことが大切である。 患児の健康と家族はつながっており、家族が疾患を理解し患児を受け入れていると、患児は自宅療養がしやすくなるため、看護職は家族に対してそれらの理解を深められるよう説明していくことが大切である。
社会資源活用の調整を行い他機関と連携する	医療・福祉サービスについて関心を持つ	子どもが成長するに伴って、安心して地域で生活を送っていくことができるように、家族や居住地域の特徴、子どもに適した社会資源に目を向けてケアを行う。 子どもが成長するに伴って安心して生活を送っていくことができるように、子どもや家族をサポートする地域の支援状況についても情報を捉えていき、体制を整えていくことが重要である。
	医療・福祉サービスに携わる人たちと連携を図る	居住地域の特性や得られる社会資源を把握し、保健師や訪問看護ステーションの看護師、養護教諭など他の看護職者や他職種と連携を取り、子どもの未来についてサポート体制を整えていくことが大切である。 先方の機関に患児のことを任せてしまえばいいというわけではなく、看護職者の役割と自覚し、責任をもって連携のために行動をしなければならない。 行われている看護が患児やその家族にとって最高のものとは限らない。既存のものにとらわれず新しい方法を考え、作り、利用していく必要がある。
子どもと家族の理解者となる	家族の言動の裏にある思いを理解する	家族の言動をそのまま受け入れるのではなくその裏にどのような思いがあるかを理解しようとする。
	自分の気持ちを伝えられない子どもの気持ちを理解する	学童期の事例では自分の気持ちを親に伝えられない、または遠慮している様子が見えなかった。思春期の子どもは目に見える態度や言葉に気を取られがちだが、それが本心と同じであることは少ない。子どもの裏の気持ちまで視野に入れて関わっていくことで、本当のニーズや不安・悩みがわかる。看護職は常にそういった視点を忘れてはならない。 思春期の子どもは自分のことを他者にあまり話さないため、選択肢を示して質問したり、日常会話から関係性を築くことによって、子どもを理解していく必要がある。

そして健康問題をもつ子どもが家庭で生活するときに、必要なケアを継続して家族から受けられるように、役割を〈家族が子どもの健康問題を受け入れられるようにする〉と捉えていた。

3. 社会資源活用の調整を行い他機関と連携する

《社会資源活用の調整を行い他機関と連携する》は、子どもと家族が子どもの健康を守り地域とつながり生活しやすくするために必要なことを表しており、2サブカテゴリに分けられた。

学生は子どもが健康問題をもって最良の状態を維持しながら地域で生活するためには、その地域で行われている医療・福祉サービスの利用が必要であり、役割を〈医療・福祉サービスについて関心を持つ〉と捉えていた。

そして効果的にそれらのサービスを子どもが受けるには、病院・施設の看護師、訪問看護師、保健師そして養護教諭といった看護職者が責任をもって関わるのが重要であり、それらの看護職者と各機関にいる他職種と情報を共有し連携し、調整を行うことが大切だと考えていた。さらに必要があれば新しい方法を構築し、受け入れ側に子どものことを任せてしまえばよいのではなく、自覚と責任を持つことが大切であると考えており、〈医療・福祉サービスに携わる人たちと連携を図る〉と捉えていた。

4. 子どもと家族の理解者となる

《子どもと家族の理解者となる》は、子どもを思う親の隠れた思いや発達段階によっては思いを表出しにくい子どもの特徴を踏まえて理解することを表しており、2サブカテゴリに分けられた。

学生は、子どもや家族の言動には隠された思いがある場合があり、特に子どもの場合は気持ちをうまく伝えられない、遠慮する、また思春期では他者にあまり自分のことを話さないこともあると考えていた。そのため言動を鵜呑みにするのではなく、役割を〈家族の言動の裏にある思いを理解する〉〈自分の気持ちを伝えられない子どもの気持ちを理解する〉と捉えていた。

V. 考察

1. 学生の捉えた小児看護の役割の特徴

1) これからの健康問題解決に向けて支援する

学生は看護師の役割を現在の健康問題の解決への役割

だけではなく、《将来の成長・発達を踏まえて健康上の問題に対して支援する》《子どもと家族が子どもの健康を守る力を獲得できるようにする》といった成長・発達に伴った将来の健康問題の早期発見や予防、そしてそれに対応できる能力を子どもと家族が得るための支援という役割があると捉えていた。小児看護の役割を現時点の健康問題や発達段階に合わせたかかわりだけでなく、成長・発達に伴って生じる問題を予測したり、それらを解決するための力を子どもと家族が獲得するといった、長期的視点をもった関わりの必要性に気づけたことは重要である。

しかし長期的視点での役割を学ぶことができた一方、現在の子どもの苦痛緩和に対しての役割が挙げられていなかった。小児看護の役割は子どもの成長・発達を促進することを基本とし、適切な情報提供と健康増進、治療過程における苦痛を緩和、意思決定の促し、子ども自身による疾病管理の促進、QOLの向上を図ること、そして家族と共に健康管理・養育を検討・実践し、家族の育児能力や家族員の相互作用を高めていくことである¹⁾。これに照らし合わせると、学生の捉えた小児看護の役割はほぼ網羅しているが、採血や留置針の挿入など痛みを伴う処置が必要な事例にもかかわらず、現時点の子どもの苦痛を緩和するという役割がなかった。先に筆者らが調査した小児看護学実習直後での学びでは、学生は安全の確保や不安の軽減を行う援助の必要性を認識しているという結果が得られており²⁾、今回の研究でこれらが記述されていないからといって学生が看護の役割として認識していないとは言い難い。しかしこの事例検討が小児看護学実習の最終的なまとめの場であることを考えると、それぞれの学生の工夫や体験を具体的に引き出して看護の役割として認識できるような働きかけは必要だったかもしれない。

2) 子どもと家族のこれからの生活を考え地域と連携する

子どもと家族の将来を考える上で《社会資源活用の調整を行い他機関と連携する》役割を認識していた。そして学生は、必要があれば新しいシステムを考えることや、看護職者としての役割を自覚し最後まで行動することを責務と考えていた。実習中には現在の健康問題そのものに対する理解が優先され、その子どもを支える社会資源の理解までたどり着けないことが多い。また子どもに関

する医療保障制度は1年次に履修するため、学生も忘れがちになってしまう。本研究の研究対象となった学生は他領域の実習を終えて、ローテーションの最後で小児看護学実習を行っているため地域看護学実習での学びなどを想起しやすく、社会資源の活用の理解などがスムーズだったことが予想される。事例検討は、小児看護学実習の経験だけでなく、3年次の実習の進行に合わせて実習後の学びの整理をしていくことが大切であると考え。

実習後に子どもの将来を考え、社会資源の振り返りを行い、さまざまな機関で働く看護職者や様々な制度に携わる他職種との連携の必要性に気付くことは、小児看護学領域内に留まらず、改めて社会における看護師の役割を認識させるために重要だと考える。また健康問題をもつ子どもと家族に寄り添い、住みよい社会を構築する一端を担う責任を学生のうちから認識していることは貴重であり、大切にしたい視点である。しかし現状では、退院支援で送り出す側と受け入れる側の情報共有、計画・目標の設定などの連携が困難な場合が多い³⁾。また障がい児を対象とした調査であるが、子どもをめぐる保健・医療サービスが充実していないことが指摘されている⁴⁾。事例検討の後にこのような子どもの健康に関する社会資源について課題が山積している現状を示し、学生にとって今後の看護の探求の課題となるような問いかけを行っていくことも必要ではないかと考える。

3) 対象の理解者となる

小児看護の対象は言語能力が確立していない時期にあるほか、思春期のように自我や社会性の発達の課題があり、他者に気持ちを伝えられない発達段階の時期もある。また親は子どもの前では、不安な気持ちを隠して接することが多い。学生は実習での体験や事例から、気持ちを素直に伝えられない子どもや言動の裏に何か思いを隠した親の姿を感じ取り、「子どもと家族の理解者となる」という役割を認識したのだと考える。関根ら⁵⁾が児童・思春期病棟の看護師が考える自らの役割の中で、一番多かった認識が「行動や表情を観察して理解する」「心の奥を理解したい」「代弁者」という子どものキーパーソンとしての役割であったと報告しているように、いかにこの時期の子どもにとって表面に現れない本当の気持ちをくみ取ることが大切かがわかる。現場の看護師が感じる役割を学生が認識できたことは重要だが、その得られ

た理解をどのように活かしていくかを考えることが必要となる。その点学生は、情報を発信する「代弁者」となることまでは捉えられておらず、教員から事例検討の機会を活かして補足していくことが必要だと考える。

2. 実習後の事例検討の効果

実習で学生は、受けもち患児に対する看護過程の展開を通して、ある特定の発達段階の子どもの健康問題について理解を深めることができる。また他学生の受けもち事例の看護問題の共有を行うことで、受けもち患児以外の発達段階の子どもについての理解が得られる。しかし西田ら⁶⁾が、一時点の子どもの理解につながっても連続体として捉えることができないのではないかと指摘するように実習の現場では、あくまでも現時点での数人の発達段階の異なる子どもの理解にとどまってしまう可能性がある。

実習では幅広い発達段階をもつ子どもを対象とした小児看護の理解には限界がある。しかし今回一事例を入院中の経過のみでなく退院後の姿も含めて考えることにより、その子どもがこれからたどる成長・発達に伴う課題と健康問題の連続性を考察でき、さらに年齢の異なる事例を検討した他グループの討論の内容を聞くことにより、疾患や発達段階の違いによる将来の問題の生じ方や、それを受け入れ自ら対峙していかなければならない子どもと家族の姿を理解した。

実習を終えたのち、数事例の子どもの現在と将来の姿を想像し、それに必要な看護を考えていく事例検討は、実習での個々の学びを新たな視点で捉え直し、さらに発展させた看護を考えるうえで有効だと思われる。また小児には幅広い発達段階があり、特有の疾患や障がいを持ち、これから成人として生活していく過程にある対象であることを学ぶ集大成の機会として重要であると考え。

VI. まとめ

小児看護学実習終了後に、実習で受けもつた事例を用いて現在から退院後までの子どもと家族について考える事例検討としてグループワークを行っている。その結果、学生は小児看護の役割を、「将来の成長・発達を踏まえて健康上の問題に対して支援する」「子どもと家族が子どもの健康を守るための力を獲得できるようにする」「社会資源活用の調整を行い他機関と連携する」「子ども

と家族の理解者となる》と捉えていた。

実習で一時点での理解であった発達段階にかかわる健康問題が、近未来の視点を提示することにより、対象についての長期的な健康問題の理解につながった。今後は、事例検討で、実習進度に合わせた学びの整理、現在の子どもの健康をめぐる社会資源の問題の指摘などを教員が促していく必要がある。

文献

- 1) 奈良間美保：系統看護学講座専門2小児看護学概論小児臨床看護総論，第11版；6-8，医学書院，2007.
- 2) 谷口恵美子，窪田佐知子，長谷川桂子，他：受けもち期間の違いによる小児看護実習での学びの特徴，岐阜県立看護大学紀要，9(2)；3-10，2009.
- 3) 萩原綾子：小児保健・医療・福祉における退院支援の意義，小児看護，35(7)；807-811，2012.
- 4) 泊祐子，松下光子，石井康子，他：岐阜県における在宅重度障がい児のQOLを支える保健・医療・福祉・教育の体制づくり，平成20年度共同研究事業共同研究報告書岐阜県立看護大学；95-100，2007.
- 5) 関根正，内田正樹，木村共美，他：児童思春期病棟に勤務する看護師の看護に関する意識，群馬県立県民健康科学大学紀要，7；63-74，2012.
- 6) 西田みゆき，北島靖子：小児看護実習における学生の困難感，順天堂医療短期大学紀要，14；44-52，2003.

(受稿日 平成24年 9月20日)

(採用日 平成24年12月12日)